

及再三。仲光倒惑不及返答。時一子幸壽丸諫父云。我今年十五歲。美女丸同年。面貌又相似。爾者殺我助美女丸公。止。仲光諫所雖當理。殺我子。失慈愛道。隨君命則且違君臣道。進退更難辨而茫然。幸壽重諫切。仍不得止。終幸壽討頭令見滿仲。美女丸重登叡山。自爾惠心成弟子。剃髮名號源賢。機熟時至。螢雪勤修學不忘。後住多田之小童寺。然悲母美女丸既聞被害。愁情淚無止。終兩眼智成盲人。雖面存命。正當美女第三周忌。請惠心僧都。惠心應請伴源賢。至滿仲館。奉掛所持佛像。說淨土快樂并有親子相迎益。勸西方淨業。悲母至心信樂。稱名切。時此尊容放光明照。悲母盲眼忽活明。惠心得時呼出源賢。依仲光父子忠義。免死悔先非。語守如來禁戒引令。源賢對面父母謝往過。同歸西方一行云々。已上舊記

自爾此尊容安置多田家而納禁裏寶庫。其後人王百二代稱光院御宇。納本山淨華院。爾當寺開山。本山淨華院第三十六世祖。依之奉荷擔此尊容下向北國。開心蓮道場。定利物地。故此尊容今留當山。於至心信樂輩者。圓滿現當二世志願。必數多異瑞。略之云爾。

口傳云此尊容。始五十一尊。四十八尊淨土歸。今三尊。即四十八尊圖畫跡有之。不思議云々。

于時寶永第三丙戌天

心蓮社第十一世住敬白

○鳥翠臺北枝墳

心蓮社の境内にあり。碑石は川石に、左の如く彫刻するのみ。

享保三年

(趙) 北枝先生 施主 藩 月 堂

(戌) 五月十二日

寺僧の傳説に云ふ。北枝は當寺の檀下にて、其の子孫を硯屋某と稱し、世々檀家なりしかど、子孫遂に斷絶して、此の墳墓も星霜を歴るまゝ追々破壊せしを、近年俳人の發起にて修造すといへり。按ずるに、俳林小傳に云ふ。北枝歿後金澤卯辰山心蓮舍葬。銘曰趙北枝先生墓。と見ゆ、又梅室句集にも。

享保三戊戌年

趙北枝先生墓

五月十二日終焉

右は古墳の銘なり。加州河北郡卯辰山淨土宗心蓮社境内に有り。天保四年今の翠臺梅田年風儘主として、土を盛り石を積みて一文餘に築上げ、玉垣を結び、灯籠一對を置き、傍に新碑を建て、銘を予に齎む。

銘 曰

鳥翠臺北枝先生は北方の逸人也と略傳にもいへり。さるを近世に至りては、下流をくむもの海内略なかばにも及び。吾徒の愉快是に過ぎたるはあらず。年風こたび古墳を再師して名址を輝かせり。左傳に所謂大德百世これを祀るとあるも、人必ず是を祀るにはあらず。天より人をしてまつらしむるものならんと、頓首再拜して識之。

千代をふる初花咲きぬ塚の苔

又梅室の花賀集にも、麻趙先生を祭る日の句註に云ふ。右天保六年五月十二日卯辰山於心蓮社、翠臺祖北枝翁の古墳をあらため築きける折の一順、おもてのみを爰に蟲帯を得てしるす。とあり。今按ずるに、右俳書共にて見れば、昔よりの碑石は趙北枝先生墓と彫刻せしを、天保の初修繕を

加へ、さて更に新碑を其の側に建て、梅室の假字碑文を彫刻せしが、其の後新古の兩碑石共に破壊して、更に今の碑石をば建てたるなるべし。

○鳥翠臺北枝傳

北枝は北越にて蕉風俳諧の鼻祖也。鳥翠臺或は趙翠臺と號し、俳名を北枝と稱す。金澤の町人研屋彦兵衛の一男にて、俗名を次郎左衛門と呼べり。俳諧傳系に森氏とあれど、卯辰集に立花氏北枝と載せたり。俳林小傳にも、加賀藩中研師立花三郎右衛門牧童が弟也とあり。加賀能登越中等、北陸道に芭蕉の門人其の數多しといへども、北枝をば隨一となしたり。故に蕉門十哲の一人とす。武州許六が撰述せし風俗文選作者列傳にも、北枝加州金澤之人也。業磨工。見蕉翁好風雅。北方之逸士也。と記載す。俳家奇人傳に云ふ。北枝は金城の磨工にして、牧童が弟なり。蕉翁その俳才を感じて北方の逸士と稱す。初め其の友如柳、軒をならべて酒を鬻ぐ。枝素より嗜むゆゑに、日毎に行きて阮籍が爐邊に匍匐ふの風流を盡したり。かく夜々の事なれば、柳